

## 乳児院収容児の短期予後

研究協力者 庄 司 順 一 (都立小児保健院)  
松 尾 準 雄 (           "           )

はじめに

都立小児保健院では、乳児院を退院して家庭に復帰した子どもたちについて、2～3カ月後来院してもらい、退院後指導を行なっている。その時に得られた資料をもとにして、退院児の家庭への適応状態を検討してみた。

対象と方法

都立小児保健院を昭和53年以降に退院し、家庭に引き取られた子ども20名を対象とした。自宅復帰15名、里親引き取り5名で、退院時の年齢は2～5カ月7名、6～11カ月4名、1才～1才11カ月4名、2才以上5名であった。20名中15名が生後1カ月以内に入院した例である。

手 続

原則として退院2～3カ月後に来院させたが、4名は退院1カ月後であり、1名は8カ月後に電話で面接したものである。

結果と考案

1) 家庭になれるまでの期間

①退院時年齢5カ月までは、7名中6名が6日以内、②6～11カ月では4名中3名が1～2週間、③1才～1才11カ月では4名中3名が1～2週間、④2才以上では、退院後すぐから1カ月以上に散ばっている。家庭になれるまでの期間は退院時の年齢と退院前の面会の頻度によって両親となっている程度に左右されている。

退院直後の問題としては、泣く(5)、夜なき(3)、夜目をさます(1)、風呂をいやがる(3)、食欲減退(3)、何となく変だ(4)であった。また家庭の中でなれにくい人として、6名が父親をあげており、とくに年長児では父親になれるまで2カ月以上の長期間をあげたものがあり、退院前の面会に父親の参加

の必要性が裏付けられた。

2) 退院後困ったこと、心配なこと。

身体的な面では、予防接種(2)、体重がふえない、カゼが治りにくい、歯がはえない、虫さされに弱い、などであった。

行動面では、寝ぐずり、夜泣き、指しゃぶり、保育園に行くとき母親から離れられない、食事を十分に摂ったあとでも片づけさせない、母親の言うことを聞かない、父親とまだなれない、男の子と遊ぶことが多いので乱暴な子にならないか、白いご飯を嫌がりおかずをのせたり混ぜたりしたが、などであった。また母親自身のこととして相談相手がいないと指摘したものが1名あった。

子どもの身体面・行動面の特徴は退院時に説明はしているが、親はほとんど理解していないようで退院後の指導の必要性が痛感された。

3) 退院後、子どもが特に興味をもったこと。

洗濯などの家事(2)、テレビのスイッチやコード、カギ(3)、動物(1)、おもちゃ(3)、新しいものはなんでも珍しい(1)、とくになし(9)、であった。施設では、食事、そうじ、洗濯などのプロセスを観察する経験が乏しいことを如実に物語っているようで、施設収容中の年長児には、このような経験をさせる機会をもたせる必要がある。

4) 施設での経験がよかったと思うこと。

退院時の年齢が11カ月までの11名中6例は「とくになし」と答えたが5名は「しつけがよい」ことに関連したことをあげ、1才以上の9名中8例が「しつけがよい」ことを1名が「友だちとすぐなれた」ことをあげた。しつけがよいことの内容は、生活が規則正しい、自分で片づける、物わかりがよく、言うことをよく聞く、などであった。

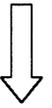
まとめ

以上の結果は例数が少ないので、決定的なこと

は言えない。退院後の指導は、子どもが家庭にうまく適応しているかどうかを観察し、必要な場合には親に助言するだけでなく、これらの資料を通じて、収容施設での生活を反省することに重要な意義がある。20名中2名は退院後の来院することに抵抗を示したことを附記しておく。



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

都立小児保健院では、乳児院を退院して家庭に復帰した子どもたちについて、2～3 ヶ月後来院してもらい、退院後指導を行なっている。その時に得られた資料をもとにして、退院児の家庭への適応状態を検討してみた。